

## 大会企画第2日目

### 子どもの貧困と芸術教育 〈特別講演〉

講演 ミキ・ブラニシュテ Miki Braniste (非営利芸術団体 Collectiv A 代表)

ラドゥ・アポストル Radu Apostol (REPLIKA 教育演劇センター共同代表)

コメンテーター 貫 成人 (専修大学教授)

司会 野邊壮平 (NPO 法人 MIYAZAKI C-DANCE CENTER 代表理事)



#### 講演 1

ミキ・ブラニシュテ (Collectiv A 代表)

こんにちは。お招き頂きありがとうございます。ミキ・ブラニシュテと申します。ルーマニア第二の都市クルジュにある非営利の文化団体から参りました。この団体は、他と共同で「刷毛工場 (Fabrica de Pensule)」という少し変わった場所を創設しております。塗装に使う刷毛の工場だったものを文化や芸術のための場所に作り替えたものです。この共同プロジェクトは2009年から始まり、美術および上演芸術の作家に声をかけてきました。私たちが工場から文化的な場所へと作り替えた最初の場所でもあります。組織としての私たちの主たる活動は「タン・ディマージュ・フェスティヴァル (TEMPS D'IMAGES Festival)」の運営で、私はその芸術監督をしており、もう一人と共同で参加作家を選定しています。私たちはいわゆるコンテンポラリーダンスの領域から出発したのですが、近年は演劇にも範囲を広げています。もう一つの重要な活動は、「遊び場—マナシュトゥルの共同の場 (La Terenuri - Spațiu Comun în Mănăștur)」というものです。

私たちが活動を始めた「刷毛工場」の写真を二点だけ見て頂きましょう (写真省略)。私たちの活動の動機を簡単に説明するために——「私たち」というのは団体の仲間たちというだけでなく私たちの世代のことでもあるわけですが——ルーマニアの美術作家であるダン・ペルジョヴスキ (Dan Perjovschi) の絵画をご覧頂きたいと思います。ダンのように、誰にでも伝わるような芸術に私はとても興味があるからです。個人的には、理論的な背景を知らなくても理解できる、専門家でもなくとも理解できる方が、芸術はより楽しめると思っています。この作家はアートワールドと社会のとても良い関係を実現しています。様々な場で活動を展開していて、彼の作品は例えば抗議活動のパナーに用いられたりして、政治的な階級をめぐる姿勢で知られていますし、この画像などでは、装飾のための空間が政治的な空間として使われているのがわかります。では本題に入りましょう。

二つのプロジェクトをご紹介します。一つ目は「アズガ夏期学校 (Azuga Summer School)」, こ

これはブカレストのアーティストおよび文化関係者のグループによる独自のプロジェクトで、文化と教育に関わる介入をテーマとしています。アズガはルーマニアでも山岳部に近い、人口6000人ほどの街です。このグループは、地元の子どもたちに必要なものは何かという所から検討を始め、ダンスや演劇や即興に親しむ良質な機会を提供するのがいいだろうと考えました。2012年から始まり、三年間発展し続けたプロジェクトです。草の根的な取り組みとして、子どもたちがより良いコミュニケーションができるように、また自分たちのことをよく知り、さらに身体についての認識を持てるように、すなわち身体の使い方、そして他の人々との関わり方ですね、これを手助けしようというものです。ダンスのワークショップから始まりはしましたが、他のジャンルにも広がって行きました。すぐに美術や音楽のアーティストたちも興味を持ってくれたのです。ところがこのプロジェクトは資金不足のため継続ができませんでした。チームとしてはぜひ続けたかったし、アズガ市役所とも長期的なプロジェクトに向けた話し合いを持ちましたが駄目でした。プロジェクトに関わったアーティストたちの継続への意志は非常に強かったのですが、資金調達が難しかったのです。彼らがこのプロジェクトを始めてみるとすぐに、学校での学習内容や知識にバラつきがあることがわかったそうです。つまり子どもたちはルーマニア人とロマが混ざっているわけです。夏期学校の期間中、アーティストたちは毎日ワークショップの後にロマの子どもたちの宿題を手伝い、遅れを解消して別の水準の知識に手が届くよう支援をしていました。知識さえあればもっと仲間内に溶け込めるはずだと気付いたからです。

ご紹介する二つ目のプロジェクトは、クルジュにある私たちの組織によるもので、先述した「遊び場—マナシュトゥルの共同の場」です。ご覧頂いているのが「遊び場」で、クルジュ近隣の大きな街の一つであるマナシュトゥルの市街地と森に挟まれた場所にあります。この街の人口は約8万人ですが、当時は公園や文化的なインフラがありませんでした。私たちは2012年にこのプロジェクトを始めたのですが、元はイタリアのアーティストのグループが私たちに声をかけて来て、一つのヨーロッパ的なプロジェクトに加わって行ったのです。彼らは振付家で、振付によって特定の地域に様々な変化をもたらすようなプロジェクトを考えていました。イタリア、ルーマニア、ドイツに渡って展開するヨーロッパ的なプロジェクトです。しかし地域にコンテンポラリーダンスを持ち込むために、まず私たちは別の方法で地元の人たちと接触し、交流をはかっていきました。様々なことをしたのですが、ここにご覧頂いているのは

廃品リサイクルのワークショップです。例えばこういうタイヤを使ってイスを作ったりするわけです。あるいは、アーティストを招いたり、才能のある地元の人々に何かしてもらったりするための場所も作りました。この地域で初めての文化的な空間です。どんな企画をやりたいか地元の人々に尋ねたところ、一部からブラスバンドの話が出て来たので、有名な楽隊を招いたこともあります。

こんな風に地域とのつながりを作った上で、人々が短い振付に参加してもらえるような方法を考えました。ご覧の写真(写真省略)はダンサーが二人と地元の人が二人、コラボレーションしている様子です。子どもたちと行ったダンスのワークショップが最も重要だと思うのですが、後でまた戻ってくることにして、先に他の様々な活動についてご紹介して全体像をつかんで頂こうと思います。これはコンサートの様子です。他にも、地元の産品を扱う市場を開いたり、子どもたちと一緒に庭園をこしらえたり、地域の変容についての議論の場を設けたりしました。これはいつも一緒に活動している子どもたちですね。以上をふまえた上で、先ほどのイタリアのダンス・グループとのコラボレーションの様子を見て頂こうと思います。

コンテンポラリーダンスというのはそう簡単に地域に受け入れてもらえる概念ではありませんから、何らかのうまいやり方が必要です。イタリアのアーティストたちと一緒に、子どもたちがダンスに興味を持つにはどうするのが一番良いか考えました。そこで子どもたちに、ダンスをやってみたいか、どんなダンスをやってみたいか、どんな音楽で踊ってみたいか、といったことを尋ねてみました。子どもたちは喜んで、自分たちの興味のあることを話してくれたので、そこから始めることにしました。例えば彼らの好きな歌をダンスの背景に使うことにしました。それとこれは是非ふれておきたいのですが、ご覧頂いているこの森はロマの家族が数世帯暮らしていて、私たちは企画を実施する時はいつもその子どもたちをルーマニア人の子どもたちと一緒に参加するよう誘いました。親よりも子どもの方が関係を作りやすいですね。ロマの子どもたちが入ってくれてとても良かったと思います。とはいえこれは長期的なプログラムとして成立したわけではなく、その都度、人々との関係を作り直す必要がありました。それも決して容易ではなく、というのも彼らはあちこち放浪して暮らしていますから、すぐにどこかへ行ってしまふのです。また、これは一度だけですが、あるプロジェクトを始めようという段階で、ルーマニアの子どもたちがロマの子どもたちと遊びたがらないということがありました。この問題に私たちは最初の年から取り組んで来て、もう見

られなくなりましたが、地域の子どもの立場に立ってそのメンタリティを変えていくということがとても重要な出発点になると考えています。

これはこの五月にルーマニアを訪れた宮崎のグループ「んまつーポス」によるダンス・ワークショップの様子です。ワークショップは私たちのフェスティバル期間中の三日間に行われ、とてもうまく行ったといえます。参加した地元の子どもたちは日本のアーティストに出会い、教わり、本当に楽しく関わられたことをとても喜んでいました。ルーマニアのアーティストに接した時よりもオープンになっていて、それは日本のアーティストがいつも非常にオープンで気さくだったというだけでなく、子どもとの活動に関して特別な技術を持っていたからではないかと思っています。実際、確かに私たちの組織は上演を実施することが目的なのですが、マナシュトゥルでプロジェクトを続けて行くには、単なるアーティストではなく、教育的な技術を備えたアーティストと組む必要があるのです。

今後の計画についてもお話ししましょう。この地域にはティーンエイジャーのグループがいます。劇団をやっています。私たちは彼らをフランスに送り、リヨンで国際的な演劇のワークショップに参加してもらって、上演もしてきました。一月からはもっと長い演劇のワークショップを開始

して、十月には彼らと一緒に制作したプロジェクトが初演を迎えることになっています。テーマは、彼らの思い描く地域の未来です。

最後に申し上げたいことは、アズガやマナシュトゥルのこうした展開はこれから育っていく小さな種であり、そのためには一定の環境が必要だということです。すなわち文化的な教育のための方針が学校のカリキュラムに組み込まれることが必要です。またこうした展開はアーティストや組織の運営者たちの多大な献身なしにはあり得ません。私たちは前進を続け、資金やエネルギーを使い果たしてしまう前に本当の公的な支援を受ける必要があります。こうしたプロジェクトはごく限られた資金と、少数の人員で運営されており、アーティストも作品作りだけでなく組織の運営スタッフや、コミュニティ・ワーク、最近では支援活動も並行して行っている人たちです。これらを同時に行うのは本当に大変ですから、狭い枠組にとらわれず、役人たちと組むことを躊躇してはいけなと思います。私たちが行っている公共的な仕事への支援を取り付けねばなりません。

今回の来日を実現してくださった皆さん、舞踊学会、宮崎大学、MIYAZAKI C-DANCE CENTERの皆さんに心からお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

(原文英語。和訳=武藤大祐)

## 講演2

ラドウ・アポストル (REPLIKA 共同代表)

こんにちは。私は演劇の演出家で、またブカレストの国立演劇映像大学でも教えている者です。まずお招きくださった舞踊学会、高橋るみ子先生とMIYAZAKI C-DANCE CENTER、そしてコーディネートくださった三宅文子さんに心から感謝を申し上げます。今日は二つのプロジェクトをご紹介します。教育的な演劇というものに本当に人々の目を開き、人々の感受性を豊かにし、お互いのことや地域の問題についての理解を深められるということを知って頂けたらと思っています。

私の芸術家としてのキャリアは2001年に始まります。『家で (Acasă)』という、社会演劇のプロジェクトでした。10人のストリートチルドレンとプロの芸術家が一緒に舞台に立ちました。ルーマニアでは、残念ながらこういった問題があるのです——子どもが捨てられる、ペットが捨てられる、老人が捨てられる。想像力も捨てられて

しまいます。そこでこのプロジェクトを通じて私が深く学んだのは、人々を客席に招いて舞台上で現実を見せると、テレビのトークショーなどよりもずっと容易に、問題について理解してもらえということでした。それでこのプロジェクトを四年間継続しました。四年間、ストリートの子どもたちは通って来て、観客の前で舞台に立ち、その後、共同生活のためのアパートを購入する資金を集めました。このアパートには部屋が四つあり、子どもたちは全員ここに入ってさらに五年間暮らしました。その間に学校をきちんと卒業し、少しずつ社会復帰していきました。現在では、全員が自分の家族を持っています。一人だけ残念ながら刑務所に行きましたが、私たちとの関係は保っていて、面会して話もしました。路上で過ごしていた彼らも今では三十代です。舞台の様子を一部ご覧頂きましょうか。〔孤児になった王子や王女が大勢集まって住んでいる館があり、ある王子と王



女がそこを逃げ出して路上で暮らすことになる…という内容のお伽噺を話して聞かせる場面が流れる。] これにはちょっとしたエピソードがあります。当時、実はこの子どもたちは文字の読み書きができなかったのです。ところが全員これがどういふ場面であるかを理解しました。そして演技を始め、どのようにするのがいいかを考え出したのです。

これが私の手掛けた最初の社会演劇で、この経験があったために、昨年私たちはブカレストにこの教育演劇センターを設立するに至ったわけです。子どもたちと、彼らが抱えている今日的な問題についての様々なプロジェクトを編み出しています。

二つ目にご紹介したいプロジェクトは『オフライン家族 (Familia Offline)』です。一年間に渡って、私と劇作家のミハエラ・ミハイロフ (Mihaela Michailov)、二人の役者で芝居を作りました。親が国外で働いているために自分たちだけで暮らしている子どもたちについての芝居です。伺ったところでは、福島県でも似たような状況があるそうですね。親が遠くで働かねばならず、子どもたちは上のきょうだいや祖父母に面倒を見てもらいながら自活しなければいけないという。ご覧の写真(写真省略)には参加した9人の子どもが写っておりますが、あとで映像も見て頂きましょう。この舞台は全て子どもたちとアーティストが一緒に作ったものです。何を舞台に載せるかは彼らが決めたのです。子どもたちが外国で働いている両親から何かを受け取る場面をご覧頂きます。何を受け取るのかは子どもたちが考えて決めました。この子は、スペインで生まれたのですがルーマニアで一人で暮らしているんだ、と言っています。スペインで生まれてルーマニアに戻されたのでルーマニア語がわからないのです。ここは贈り物が届く場面ですね。冷蔵庫、洗濯機。「お父さんお母さんが帰って来ますように。会いたいよ」と言っています。これは両親から送られてきた箱を開けたら赤ちゃんが入っていたという場面です。ヘスス (Jesús) という名前が付いています。「ジーザス」のスペイン語名ですね。「お父さんもお母さんも生きています。お母さんに会いたい。お父さん、

いつ帰ってくるの?」。しかし二人とも「無理だ」と答えます。「無理なんだ」と。こんな状況で子どもたちは過ごしているわけです。この写真の子どもたちは祖父が面倒を見ています。この作品を持ってルーマニア各地を回れたのはとても良かったと思います。子どもたちと老人しかいない街をいくつも訪れて上演し、終演後には観客との討論の場を持ちました。この社会問題をどう解決すべきかを議論したのです。

もう一つご紹介しましょう。これは先ほどと同じ子どもたちと作ったもので、国際条約である「子どもの権利条約」を扱った作品『権利を持つ権利 (Față de drepturi)』です。子どもたちはこういう条約があること、自分たちにも権利があることを知りませんでしたので、一緒にこれを読み、それから条約について、一つ一つの権利について検討していきました。そしてどんな場面を見せれば親や教師たちに子どもの権利ということを考えてもらえるかを考えました。舞台は何から何まで子どもたちの考えを反映しています。



この写真にはヘルメットをかぶった小さな子どもが写っています。彼は子ども警察官なのです。子どもたちは、自分たちの問題は自分たちにしかわからない、大人の干渉は要らない、と考えたわけです。この子ども警察官のアイデアは、彼らが学校で経験したある出来事由来しています。学校に警察が来たというのです。子どもたちが喧嘩をしたので、ことのいきさつを警察官の目の前で文章に書いて説明させられ、ショックを受けたと。それで彼らは私たちの演劇ワークショップに来て、これは違う、大人ではなく、子どもの警察官じゃないといけなかったわけですね。舞台ではあらゆる子どもの権利は子どもたち自身によって守られていて、子供警察もあるわけですが、さらにある装置が考案されていて、大人が感情的に怒ったり暴力的になった時にそれを使うと大人の動きをフリーズさせてしまうことができるのです。子どもたちが観客とやり取りする場面もありました。観客の中の誰かがイライラした素振りを見せたり大声を出したりすると、子どもがボタン

を押し、すると大人もゲームに加わって、フリーズして見せるのですね。こんな風に、子どもは大人や親たちに、憲章には子どもへの暴力を禁じる条項があるということを教えるわけです。それと、子どもたちはカラオケが好きなので、舞台でもカラオケによる生の音楽をよく使います。客席にいる子どもも一緒になって歌ったりします。これは

親が子どもを無理矢理にテレビに出演させている場面です。親は子どもに有名になってもらいたくて、テレビに出して子どもの才能を自慢しようとするのです。子どもを巻き込むテレビ番組についての場面です。私からのお話は以上です。ありがとうございました。

(原文英語。和訳＝武藤大祐)

## 総括

貫 貫でございます。よろしく申し上げます。残り9分ですので、簡単にお二方のお話をまとめて、その後フロアからご質問いただく時間を残したいと思っております。

私もつい昨日今日、知ったばかりなのですが、ルーマニアでは、経済はじめ、状況が非常にシビアだそうです。貧困が蔓延し、また、お話にありましたが、捨て子も多く、ロマ人との民族間共生問題もある。その中で、「アートへの権利はだれもがもつ」「アートによって人々を豊かにし、目をひらくことができる」という理念をもって、お二人が、それぞれ、年間3～4、あるいはそれ以上のプロジェクトを走らせているとのこと。各プロジェクトでは、7歳から18歳くらいまでの、30人から300人ほどの子ども達が保護・援助の対象となっており、その結果、ラドゥさんからお話があったように、捨てられていたストリートチルドレンが大学進学、就職を経て、社会人として自立する、といった成果が上がっている。

ルーマニアは旧共産圏なので、国立劇場などのシステムはしっかりしているそうですが、お二人は、それとは独立のNGOとして活動をしており、しかも、アーティストだけでなく、文化政策やアートマネジメントの専門家、広報、さらに、地域住民とのコミュニケーション担当者などが、チームを作って、社会のさまざまな部分で効果をあげている点、私たちが学ぶべきところがあるのではないかと思います。

昨日のシンポジウムでも、子どもの貧困とダンスとの関係がテーマになりました。お二人は、まさにそれについてお話しくださったわけですが、それについて私として実は三つの質問を用意しておりました。一つは、不登校の子どもに対処する方法はあるのかという点、第二に、ダンスがそのような意味を持ちうるのかという点、第三にそこで創作ダンスがどういう意味を持つか、という三点です。しかし、それについて、あらためてお二方にお答えいただく時間はもうございませんし、じつは、既にお話の中でお答えは出ていたようです。登校拒否児童については、細かなサポー

トや人々に溶け込ませるための試みのお話がありました。ダンスについては、その他のアート、音楽、美術に比べて、より人びとを自由にするし、子ども達もそれによって自由に動けるようになるということでした。最初に野邊さんからお話がありましたが、んまつ一泊がルーマニアで三日間のワークショップをおこなった際、はじめはなかなか合わなかったロマ人の子どもとルーマニア人の子どもがうまく一緒に動くようになり、最後は一緒に踊って握手までするようになったという成功例がありました。第三に、子ども達自身による創作につきましては、演劇でありましたが、自分達の置かれた状況をもとに子ども達が自分でシーンを創って作品を創り、それによっていろいろな成長が見られるということ、ラドゥさんをご紹介くださいました。



お二方のお話を、昨日来のこの大会での議論や視点からまとめると、大略、以上のようになると存じます。それでは、会場の皆さんからご質問、コメント、情報などございましたら、残り4分にはなりましたが、ぜひ手を挙げてご発言いただけたらと思います。

**質問者(武藤)** 興味深いお話ありがとうございました。たくさん国際的なコラボレーションを、つまりイタリアのアーティストと一緒にとか、フランスでワークショップを受けてそれをまたルーマニアに還元したりとかされていて、もしかしたらルーマニアの国内のアーティストよりも外国人のアーティストと作業をした方が、国内の対立とかボーダーみたいなものを超えやすいというようなことがあるのかなど。どういった意味合いで国

際的なコラボレーションを地域の問題解決に役立っているのか、その辺についてお伺いしたいです。ミキ ご質問ありがとうございます。未知の状況の中に入り込んで作業をする時、つまり取り組みの初期の段階では、外国のアーティストと組む方がやりやすいと思いますね。しかしルーマニアの中に民族対立があるという風には申せません。果てしのない対立という感覚はないのです。ただレイシズムは存在していて、クルジュにはとても強固なハンガリー系コミュニティがあるのですが、それでもルーマニア人とハンガリー人が対立しているとはいえず、むしろ両者の間は無関心によって隔てられています。こちらはこちら、そちらはそちら、という黙約のようなものです。こういう関係、「無関係という関係」とでもいいでしょうか、これは対立ではないのですね。それと例えば私たちの拠点である「刷毛工場」ではアーティストも文化関係者もルーマニア人とハンガリー人が混在しています。仕事をする上では民族の問題は何もありません。文化の領域ではとても強い関係が成り立っていて、クルジュにはルーマニア人の国立劇場とハンガリー人の国立劇場の二つがあり、毎年コラボレーションしています。日常生活では、同じ街区の中でルーマニア人の家族とハンガリー人の家族が会話していますし、対立はあくまで政治レベルのことに過ぎないと思います。政治の領域でのことが根拠になって、私たちはとても異質で、そこから対立が生まれるかも知れないという考えを抱いてしまうのでしょうか。先のご質問に戻ると、おっしゃる通り、例えば外国から来た第三者に入ってもらうことで人々やコミュニティを互

いにつなげることが容易になります。この第三者というのはモデレーターのような、いわば客観的な存在ですね。外国のアーティストと仕事をするようになったのは、コミュニティの中で作業することに興味を持つアーティストがルーマニアには非常に少ないからでもあります。私たちのような、社会的現実に関心を向ける文化関係者や芸術家は、ルーマニアでは少数派なのです。

**野邊** ありがとうございます。まだまだ続けたいところではありますが、時間がきてしまいました。このあと、次のプログラムまでに少し時間がありますので、是非直接にお話を伺ってください。よろしく願い致します。最後に一つ。ラドゥさんが紹介してくださいました取り組みで驚いたことがあります。それは、出稼ぎ等で両親と一緒に暮らしていない子どもたちがツアー公演をする際に、学校や先生がそれを許可したということです。子どもたちをどんどんそういう世界に送り出していくそうです。これは、なかなか日本ではできないな、と。ただし、子どもの貧困がさらに大きな問題になってきたら、芸術教育ができることの一つとして、私たちも考えないといけないな、と思いました。今回はルーマニアの事例でしたが、さらに視野を広げて、芸術教育が子どもの貧困にできることは何かを考え実践したい、と思います。

予定しておりました時間より5分オーバーしましたが、これを持ちまして特別講演を終了いたします。改めましてルーマニアからお越しいただきましたミキさん、そしてラドゥさんに大きな拍手をお願いします。

大会企画第2日目

ダンス観賞⇔ダンス観戦



作品1 <あれは…風?>  
宮崎大学教育学部附属小学校アートクラブ



作品2 <マリンバ天国>  
NPO法人みやざき子ども文化センター「キッズ  
アートアカデミー」受講生 (キッズ☆スター)



作品3 <「ママーム」で遊んでみた!>  
平成27年度宮崎市民プラザ自主事業  
「コドモチャレンジスクール」受講生  
(ダンスクラス) 講師: んまつー波斯

サプライズ企画  
作品4 <Hurdle>  
んまつー波斯  
(宮崎空港エントランス)

